

市芦救援会通信

市芦救援会通信 通巻109号 01/10 <1部100円> 発行人 玉本 格
 市芦救援会 〒659-0001 芦屋市剣谷9 市芦分会気付 0797(32)1131
 市芦反弾圧闘争を支援する会 〒650-0022 神戸市中央区元町通5-3-16 テーラービル3F

9・9 「市芦があつて何が悪いねん！市民集会」に一一三〇名

9・25 芦屋市教育委員会傍聴、存続を求める卒業生

・市民の声が市教委を圧倒し市芦廃校を審議できず

九月九日、芦屋市民センターで「市芦があつて何が悪いねん市民集会」が持たれた。卒業生、保護者、市民、教員、支援者など一一三〇名の参加者があり、熱気溢れるものであった。

最初に卒業生三人がそれぞれの市芦での学校生活に触れ市芦存続を強く訴えた。卒業生Nさんの在学時代の話は参加者を圧倒する内容であった。「市芦があつたからこそ今の自分がある。遊びほうけていると、このままでええんか、親のことどう思ってるねん、としつこく迫ってくる教師。いつら本当に自分のこと心配してくれてるんや。私は市芦で人間としての生き方を学んだ。こんな学校はあらへん。他の学校と一緒にせんといて欲しい。市芦をなくさんといて欲しい」と市芦の存続を訴えるNさんの力強い言葉に、会場の参加者は、市芦をなくしてはいけないという思いを一層強くした。

また、市内中学校に通う子どもを持つ保護者は、「市芦がなくなったら、私らのような経済的に苦しい家庭は子どもを私学などに行かせられないし、学力的にも心配なので市芦しか考えられない。市芦がなくなったら本当に困ります」と訴えられた。

このほか中学校の先生、定時制高校の先生等、各方面から、市芦は今からの時代に本当に必要な学校なのだという意見が出された。

最後に集会決議を全員で採択し、今後の行動予定として、九月一五日日市営住宅戸別署名行動、二五日日市教委傍聴を確認して閉会した。決議文は翌一〇日、市民の会代表が市教委へ出向き、市芦存続を強く要請し、提出した。

九月二五日、市芦廃校を議決するための市教育委員会が開催された。

(次ページへ続く)

も／く／じ

市芦救援会ホームページ <http://homepage1.nifty.com/i-kyuenkai/>
 Eメールアドレス i-kyuenkai@nifty.com

9月9日(日)「市芦があつて何が悪いねん！市民集会」開かれる

市芦には誇るべき文化があった 2 市芦を必要としている階層の人たちがいる 15
 市芦を普通の学校と一っしょにしてほしくない 4
 社会は底辺の人たちを排除している 7 新入生一四人でも募集続ける私学 15
 やさしさと怒ることの大切さを学んだ市芦の三年間 8
 情が流れているから人が寄る 9 在校生・卒業生の力で学校を守る 16
 私たちは市芦を必要としている 12 本当の学びを高校の中に取り戻す 18
 市芦ロードを歩くのも将来への道 13 市芦をつぶすことは文化の破壊 19

五〇人近い傍聴者で会場は立錐の余地もなかった。委員会が開会する直前に、市民の代表から「今日の教育委員会で市芦廃校を決定するのはおかしい。広汎な市民から意見を聞くべきであるし、教育委員会はそのような努力を一切していない」と強い抗議がなされた。三時間に渡る抗議の末、委員会は「今日は市芦廃校に関する議案は審議しません」と宣言し、市民・卒業生の懸命の抗議の前に、その日の「市芦廃校」の議決を断念した。しかし予断は許さない。ただ時間を延ばしただけであって市教委の結論が変わるはずがない。一〇月八日には再び委員会が開かれる。「市芦があつて何が悪いねん！市民の会」と組合は、教育委員会に話し合いを申し入れている。どのようなことがあつても廃校の結論を出させてはいけない。

卒業生・市民・教員の声 市芦があつて何が悪いねん！市民集会

市芦には誇るべき文化があつた

小寺山 康雄（市民の会代表）

卒業生とか教師とか親とか以外の市民というところで私が代表を務めております。

四月に結成集会をやりまして、今日で大がかりな集会は二回目ですが、最初の時は学校関係の方が多かったと思いますが、今日は女性が多くて、卒業生の方が多く来ていただいていると思います。

僕らが全く個人で（組織的取り組みはやろうと思ってもできないですが、）住宅を回ったり、駅前で三回ほど署名運動をしたり、その中で廃校反対の署名が三千名（九月三〇日現在六千名）ほど集ま



っております。目標は一万だったのですが、それから見ると三分の一しかありませんけど、大半が市内の方です。市芦市民八万で有権者六万ということで見ますと、勿論ささやかではありますが、それだけの署名を集めることが出来たということは、私たちは胸を張りたいと思います。

私は六年前の震災を契機にできた「市民がつくる芦屋会議」の世話人をやっております。阪神間はその他の地域と違って、震災は終わったと考えられておられる方は少ないと思いますが、芦屋でも様々な問題が残って今なお市民運動が続けております。

この被災者運動を通じて私が感じたことは、あの地震は天災でありましたが、

しかし、それにつつまれる人的な災害、あるいは行政の問題、政府の問題、人間が新たにその被災者にむち打つかのように、さまざまな災難をふりかけてきたということだと思います。

この国は人間の普通の営みすら無視する。公的な機関が公的な機関にふさわしい援助をするということを全くしてこないという国であつたということをしみじみと六年間の闘争を通じて感じました。

今回これも震災と関連しているんですが、市立芦屋高校は約四〇年に及ぶ歴史がありますけれども、それを少子化と財政難という二つの理由で廃校にしようとしています。こういう学校の統廃合問題は、阪神間の多くの学校を襲っている災難であります。定時制であつたり通信制であつたり、いわば正規の学校教育を何らかの形でドロップアウトをしなければいけない人たちが必要としている学校に、集中的に廃校とか統合とかいうことが襲いかかっている。

したがって廃校の本当の理由は、一般的に、子どもの数が少なくなつたからとか財政が苦しいとかいうことではないというところが、今進められている統廃合の歴史を見ても分かつて思ふんです。市芦高校はその中でも、彼らの思惑がもつとも露骨に現れている廃校の策動ではないかと思ふんです。

私自身は、八六年以降三年間に九人の先生たちが強制配転されたとき、その中の二人、吉岡さんと鈴木さんが同じ大学の友達だったという縁で、五・六人の市民と全く自主的に、お金も自分たちで出して、ビラを印刷して全戸配布を三回ほど義憤に駆られてやった経験があります。

その時なぜ義憤に駆られたかというところ、市芦高校が出来たとき、「せめて高校だけでも行かしてやりたい」という親の願いがこもつて出来て、その中で強制配転された九人の先生が中心となつて、もっと公立高校に相応しい学校にしようではないかということ、様々なことに取り組んで来たということがあつたわけです。

小中学校の時に学力が奪われて高校行くこともできない子ども達に、一からそういう知識を身につけようという努力とか、差別を受けている子ども達の、なぜ差別を受けているのか、あるいはどうして人は差別するのか、というような問題についてのアプローチとか多くやつてきたわけです。

それが、言ってみれば芦屋市の教育のトップにいる人たちとか行政のトップにいる人たちにとっては気に入らないことだったわけです。芦屋市が市民の税金で学校を作っている限り、いわゆる進学率

のいいエリートを出るだけ沢山つくる学校に本当はしたかつたんではないか。それが、そういうふうになんか上手いかな。上手いかなどいふところか、エリートでない人たちが大切にされる、そういう学校教育というのは許せないということを感じてきたからこそ、その中心となつた九人の先生方を追い出した。追い出したあと、学校教育審議会が今年三月二十四日に答申しましたが、わずか二回、延べ三時間の審議で廃校を、これも当初議題になかつたことを抜き打ち的に議題にして、廃校を決定したわけです。ということとは、自分たちが考えている市芦と違つた方向にいつており、強制配転したにもかかわらず、自分たちが思っているような成果が上げられず、そのいらだちから廃校にしたのであつて、財政難とか少子化というのは取つて付けたような理由であります。

少子化であれば、今まで市芦でやってきたような教育を小学校から高校校までもっと丁寧に、教師の数をそれに見合う数を増やしたりできるはずなんです。財政難というのであれば、総額254億円も使つて、南芦屋浜の公園、そのうち借金が半分近い、借金の利子だけで市芦がそのまま七年間充分運営できる財政事情であるわけです。財政難という理由は全く当たっていない。教育だけではなくて、

中学校になると「恥ずかしい」という気持ちが出てきます。テストがあつて数学が返されたら、点数がもう一桁しかないから一生懸命点数の所折り曲げるんです。そういう時にかぎって数学の先生は「自分の点数恥ずかしがるな。あける」と言いはるんです。「開けられるような点数ならあけてるのに」と思うのに、「あんた、どうしてくれるんよ」と思いつながら、そういう仕打ちをされながらもなんとなく筆箱で隠してみたり、一生懸命抵抗したりですつとやつて来たんです。

やつぱし友達からあほやねんと言われるのいややから一生懸命教室に座るんです。でもこんだけあほやから中卒でもええわと、高校いかんでもええわと思つていた。

実家が商売してました。母がはやくからいなかっただけで、父と姉と3人で暮らしていたんです。それで中卒でも親父の仕事手伝つてばいいか、と思つてた。このままでいいかと思つていた時、中学校の先生から市芦つていうのがあるよ、進路保障つていうのがあるよと聞かされたんです。

進路保障って何かなと思つていた時に、学校に行きたくても行かれへん、自分が勉強する気があるんやったら学校に入れようという芦屋市の考え方が今ある

んよというの教えてもらつて、市芦という存在をそこで初めて知つたんです。

それで、ひよつとしたら私でも中卒いうより高卒という肩書きの方が、これから社会に出た時に何か役立つかなつて考えたんです。とりあえず受けてみるだけは受けてみよう。あかんでもお父ちゃんの仕事したらいやんというぐらい簡単な気持ちで受けたんです。

なんとか通ることが出来まして、私も通つたんや、よかつた勉強できるかもしれへん、もう一回ちよつと頑張つてみようかなと思つて市芦に入ったんです。

ショックを受けた。市芦の数学は算数だったんです。一番最初にやつたのが先生は手書きのプリントで授業してるんです。タイトル一枚書いてあつて、半分半分で分かれて、その半分は二分の一。二分の一と二分の一は一。バケツに水半分は0.5とか。本当に基礎だったんです。英語もABCから、書き方から読み方から本当に基礎から始めました。私も勉強できなかったけど、私よりもっと勉強できない子がいた。

そこでまた悪い虫がでまして。これぐらいやつたらまだ大丈夫やと、もうちよつと遊んどこかと、気が緩んでしまひまして、大丈夫やもうちよつといけるやろと思つて。J.Rの芦屋駅までは行くんです。鉛筆一本だけいれて、私服です

し、芦屋駅まで行つて、ふつと気がついたとき切符を買つていて自分がいて、そのまま三宮へ行つてというのを何回かやつて、一学期は行つてもすぐ帰るとか、だんだんそういうふうになつちやつて、やつぱし学校行かなかつたんです。

親父は全然知らないですから、学校行つてるもんだと思つてたんです。でも、私はズルコをこいてつと学校へ行つてなかつたんです。ある日、知らん顔して家帰つてきたら担任と副担任が雁首そろえてるんです。親父はごつつい顔しておるんです。おもわず一言「きたないことするな」と先生に言うたんです。「なできたないことやねん」と言うから、「家にくるなら都合聞け」と言うたんです。「お前いつもおらへんやないか」それもそやなつて思つて、言われへんかと思つて。

親父にバツコバツコにしばかれて、「お前が学校行きたいいうたら行かしたんやろ。だれも行つてくれ頼んでへんわい」階段から突き落とされて、殺されそうなくらい突き落とされて、私はそんな時も、そんなもん先生が来るからや、先生が悪いからやと、黙とつたらわからへんのにと、すつこい恨んだんです。

それからまた教師が嫌いになつて何も言うこと聞かなかつたんです。とりあえず親父と約束して、「せめて学校行け」

市芦だけではなくて、福祉とか医療とか様々な問題で切り捨てております。つまり、彼らの立てた理由そのものが全く根拠のない、そういう理由で市芦高校を廃校にしようとしている。

私は、もし芦屋市が文化都市を自認するならば、これほど文化的な営みをやってきた高校はないのではないか。わたしはこの街はあまり好きではありませんが、市民として胸張つて言えることの幾つかの一つに、市芦高校の四〇年に及ぶ営み、苦闘というものがあつたと考えております。

ですから、この闘いは絶対妥協なき、彼らが廃校方針を撤回するまで、断固として闘い抜かなければならない課題であると思います。

明日、さっそく決議文を持つて教育委員会に掛け合いに行きますが、二五日は教育委員会が開かれます。いままで一回も議論していないのに、最終的に廃校を決定しようとしてます。これにも押し掛けていかなければなりません。

一つ一つ抵抗して意地を見せるけども、だけどここの意地は大義にたつた、二一世紀に向かう、新しい人間的な諸関係を作つていく、根幹に迫つた課題だと考えております。

そういうことでは、一つの学校が潰されようとしている問題は、私たちが抱つ

市芦を普通の学校と
いつしよにしてほしくない
灘本 京子(一三回卒業生)



て立つ人間的な関係は何かということが問い直されている問題だと思うので、断固私は闘い抜きたいと思ひます。

今日は色々な人から問題提起を受けてこの集会を営みあるものにした。

私は市芦一三回生の灘本です。普通のお母さんですけど、私がどうして市芦が潰されたら困るかということを少し話したいと思ひます。

私は小学校の算数の時間、通分の單元ありますね、それでつまづいちゃったんです。もともと勉強好きじゃあないです、遊ぶ方が楽しいです、遊んでばかりいまして、算数の通分いうので全くわけが分からなくなつてしまひました。

私たちの時代も、四五人から五〇人の詰め込みの人数で教師は一人だけということでした。一人でも分らない子を先生はおいていつちやうんです。見て見ぬふりをしてそのまま進んでいつちやうんです。子どもですから「先生、わからへん」というのがなかなかやっぱり言えなかつた。教師も一人一人を見るなど余裕もないし、そのままいかされてしまひました。

結局どうなつたかといつたら、ますます勉強が分からなひ。何をやっていのか分らない。授業が始まると、四五分間ずつと座つてなきやいけなひ。「なんでやる。なんでこんなことしとかなひけないんやろか」と思つても、「学校へは行かなくてはいけなひから」と思つて、学校へ行つてました。

でも友達にもよう聞けへんで、ずっと小学校、中学校と行つてました。

せんと」と、というような話を普通に出来るんです。「あんたが甘いからや」とか、皆言ひあえるんです。そんな学校の卒業生は他にはないと思います。多分他では、うちの子はあんなところに行つて、こんなところに行つてという自慢話ばかりになるようなクラス会だと思ふんですけれど、二〇何年間も、いい歳してんのに、未だに安い炉端焼屋を探してやるようなクラス会ですけれども、話の中心は全然違う。他の人と違うことを本当ににみんなと相談し合つて生きていく。自信をもつて困つた時にはこんだけ友達がいてるんや、心配してくれる人がいてるんや、ということをはかり合えるんです。だから、二〇何年たつても毎年卒業生が集まれるんです。

こんな学校は多分他にないと思うんです。だから、そういう思いをやつぱり私は息子にも味あわせてやりたいと思ふんです。これからいっぱい楽しい勉強して、いっぱい楽しいことあるし辛いこともあるけど、でも振り返つた時によかつた、自分やつてきたこと間違つてなかつた、と思えるように子ども達もしてやりたいんです。だからどうか市芦を潰さないで欲しいです。私みたいな人でも、まあなんとかやつていけるよという自信をもたしてやつて欲しいと思うんです。だから協力して下さいお願い

て言われて、「まあしやあない行こうか」となつて行つたんです。行つたけどやつぱり、友達もほとんどいないし、面白くないなという感じで、ちよこちよこさぼつてはうろうろしてたんです。

そしたら先生は追いかけてくるんです。市芦の先生はどこでどうレーダをはつてゐるのか知らないですが、行き先がちゃんと分かつてゐるんですね。神戸でも大阪でも、どこでもほんとに朝の早よから、(先生、君は授業はどうしてんねん)、ゐるんです。夜でも一〇時、一一時から遊ぶから、そこから先生は追いかけてくるんです。「帰ろうや」と、「うるさい」と言われながらでも絶対ゐるんです。気が付いたらそばにゐるんです。「お前、今なにしとんねん。それでええんか。お前のしたいのはそんなんか」ずつと言ふんです。お前の親はそんなんで育ててきたんか。

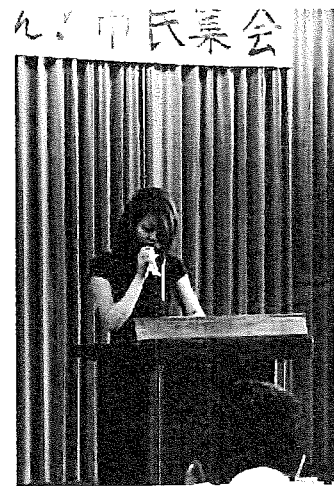
親のことといわれるの一番いやな年代の子に一生懸命言ふんです。「親は親、私は私」「でも生んでくれたのは親やろ」とずつと喧嘩しながら、気が付いたら、同じ先生やないですが、いろんな先生が声かけてくれるんです。「ほんまにそれでええんか、ほんまにそれでやつていけるんか、それで満足なんか」て言われてずつと一年くらいしつこく追いかけてました。

ある日、何でこんなに言ふんやろと、今までの先生やつたら一人の人間のことなんかはつていくのに、なんでこんなに言つてくるんやろと思つてた時に、本気で子どものこと心配してくれるんや、本気で私のこと心配してくれるんやと思つた時に、これだけ私のことを考えてくれるのに、私が先生の言つた意味を考えへんかつたら人間じゃないなつて、その時本当に私にも必要としてくれる人がゐるんやつて気がついた。

それでいろんなこと言われてきて、耳の痛いことばつかり言われているんですけど、でも自分の今までのことを振り返るチャンスを与えてくれたんです。それで何がしたいやろ、どんな大人になりたいんかと思つた時に、私は「アホ」でしたから、「アホ」でもいいからとにかく人の痛みが分かる人間なろうと思つたんです。そのまま一生懸命生きていけば何かできるかもしれないと思つて、市芦卒業することができた。

今は、娘が二一と一九と一番下が七つの子です。上二人は高校関係ないですけど、まだ七つの子が一人いますので、その子もまた私と同じような道を歩んできた時に、本当に心配してしてくれる先生がいてなかつたら。

私は市芦の先生がいたから、まともな道を歩んでこれた。曲がりなりにもお母



社会は底辺の人たちを

排除している

荒西 小百合 (二四回卒業生)

二四回生の卒業生です。私は非差別部落出身と言ふことで進学保障制度を受けて市芦へ行きました。進学保障というのは部落差別によつて学力が奪われてきたという中で、学力を取り戻していこうという事で、地域の先輩達が市の方へ教育を付けさせて欲しいとか、学力の保障をして欲しいと要求していって、勝ち取ってきた制度なんです。それは他のしんどい生活をしている人たちとかも受けて入学出来る制度でした。それを大事にしていこうということを受けて行きました。

さんという立場になつて、子どもも産んで、子どももそれ相応に、先生になんやかや言われても、「担任は一年もつたら終わりやないの。私はこの子と一生つき合うねんから、ごちゃごちゃいいな。うちの子やつたら私が責任とるわ」と言い返しなつたら、親と教師と喧嘩しながら育ててきます。やつぱり市芦がなくなつてしまつたら、もつと子ども達が可哀想だなと思つて。本当に今の子つて、人に裏切られてばかりで、さみしい思いしていると思うんです。

友達も少なくてゲームばつかりして、学校行つても本当に心から笑つてしゃべれる友達とかゐるんかなあ、先生と本当になんかしゃべることが出来るんかなと思つてみる時に、市芦は勉強だけでなしに、人間関係のつながりとか、人の痛みとか、自分のことをもつと見つめなさいとか、基本的な生き方を教えてくれる学校なんです。

だから普通の高校とは一緒にしたくないんです。どこにでもある学校はいっぱいあるんです。でも市芦は生き方を教えてくれる学校ですから、他にはないんです。卒業して二〇何年たつていますけど、毎年クラス会やつてます。ずつと同じメンバーが来て一年間会わないのに本気でモノが言えて、「うちの子がいじめられてんねん」、「あんた親がしつかり

進学保障を受けて市芦へ行くということとは非差別部落出身生ということとで高校の中で頑張つていくことだと思ひます。高校の中で部落研活動をして、校門前のビラ撒きとかクラスの中で出身宣言もしてきました。仲間と一緒に支え合つてきたからやつてこれたというのがあります。その進学保障が糧になつてたと思ひます。

今は進学保障もない状況ですが、今の社会は底辺におかれてゐる人たちをドンどん排除していると思ひます。地域の子どもや青年を見てても分かるけど、学校へ行かないで、家に引きこもつて一歩も外へ出ない子とか、登社拒否する子とか、未だ生業につけてない子とか、差別の実態がまだまだたくさんあります。

今は、私は一年と二年生の子どもをもつ親として言いたいんですけど、まだ小学生ですけれども、市芦が廃校にされようとしてゐることを聞いたら高校のことを考えてしまいます。市芦が無くなつたらどこに行かせたらいいのか、不安が大きいです。行く高校もなく働かざるを得ないようになるのではと、安心して高校を選べない。進路を考える自由を奪われているようなものです。

市行政は学力を保障していく責任があるというのにその責任を放棄していることに対して、私はすごく腹がたつていま

す。これからの子どもを考えると、やっぱり市芦廃校ということは絶対に許されない問題だと思います。私は反対していく取り組みとかも、行動してやっていきたいと思っています。皆さんと共に協力してやっていきたいと思っています。

優しさと怒ることの大切さを

学んだ市芦の三年間

崔孝行（一〇回卒業生）

一〇回生のチェ・ヒョヘンといいます。チェというのは日本語で漢字一文字の崔という字です。それで朝鮮読みでチェといいます。私は神戸市に住んでいますので、芦屋市民でもないし、子どももおりませんので自らの子どもの進路、学校を考える、教育を考えると立場でもありません。けれども、三点ほどこの場で言いたいことがあるかなあと思っています。

一つ目は、私、大変生意気な高校生でしたので、後ろにいらっしゃる鈴木先生なんかとも幼いなりに、朝鮮人に生まれた子どもとしての屁理屈というんですか、理屈にもなっていない屁理屈をふっかける訳です。それに対して、鈴木先生をはじめ当時の市芦の先生方が愛情深く

対応してくれたというのは、私が市芦を卒業してからはた気がつきました。そんな私の市芦の三年間の中で一つ、今の私にも大きく影響していますけれども、やさしさというのを勉強させてもらいました。私のアボジとオモニは震災後もう亡くなってしまったんですが、アボジとオモニを本当に愛する、理解するというのを何十冊、何百冊の本を読むのではなくて学んだのが市芦でした。そういう意味で市芦の三年間がなければ、私の人生は少し変わっていたものになっただろうと思います。

二つ目は、そのやさしさの裏返しですけども、私は今でも怒りっぽい性格でありたいと思っています。「怒る」とか「いかる」とかいうのは、やっぱり、人間の一番大切な感情じゃないかなあと思います。台風が来たから、天気が悪いから空に怒るということはしませんから、人間は。やはり、正義ならざるもの、善くないものに対して、やはり人間はいかるし、怒ると思います。そういう意味で市芦の三年間を通じて、「やさしさ」といかる」ということの大切さを三年間通じて学びました。

その中で今、市芦が廃校されようとしているのに関しまして、先ず私は71年に市芦に入りましたが、例えば、進学保障がどうなのか、部落研や朝文研の子ども

ます。私、市芦を出てから統一運動のようなものを小さいながらやってきましたけども、ずっと私は統一はなると信じて運動しています。それは、今年統一が出来なくても、来年統一が出来なくても、必ずや統一は出来ると信じて、私は統一運動を今もやっています。しかし、市芦がなくなったら、それでしまいなんです。震災後、多くの被災者たちが生きるための闘いをやってきましたけども、それと同じように市芦の廃校を阻む、阻止する闘いは何が何でも勝たなければならぬ闘いだと思っています。意地を見せて、よく頑張ったね、で済むものではないと思うんです。もし市芦が無くなったら、その結果は今年に現れない。来年は現れない。しかし、五年後、一〇年後、この芦屋に住む、高校進学の子どもたちを持つ親だけではなくて、そういう人たちも含めて、多分、芦屋の親たちが、芦屋の教育が、ひいては芦屋の雰囲気、芦屋の雰囲気ではないかと思っています。そういう意味で、市芦の廃校を反対する、阻止する闘いは何が何でも勝たなければならぬ闘いだと思っています。

最後に、改めて、この場に参加して、多分、この場に皆さんが集まられている、その原動力となった一九七〇年代前半の進学保障があり、部落研があり、また朝文研が出来る、そのような、ある意

味で市芦の中で、様々な試行錯誤の中で、頭をぶつけぶつけ、ヨタヨタしながら歩んできた、その数年間を市芦の中で経験した私からのお願いとして、何が何でも市芦を残す。そのための闘いに関して、私は芦屋市民ではなく神戸市民ですけども、出来ることは何でもやりますので、頑張りたいと思います。私が頑張る訳にはいかないのです。芦屋に住んでいる皆さんが、先ず頑張ってもらわないと、私も頑張ろうがありません。ですから、無理な、厚かましいお願いかも知れませんが、私も精一杯頑張りますので、皆さん、それよりもっと力を出して、市芦を残すための芦屋の人たちの闘いを共に創っていききたいと思っています。

情が流れているから人が寄る

永岡 英子（市芦保護者）

こんにちは。永岡と申します。私は、芦屋の人間でもなく、九州の長崎という所から、集団就職で関西に来た人間です。それこそ一クラス五〇人以上、六〇人近い、そんな高校を卒業して、長崎にいても面白くないから、ちよつと行かないかという感じで、この関西に出て来た訳な



たちや肉体にハンディのある身体障害者の子どもたちを甘やかすような教育を市芦はやっているのか、ということに対してとことん話するならば、話すことは出来るんです。それは大切な事だと思います。しかし、今、芦屋市の行政がやろうとしているのはそういうことではなくて、あの九〇年代に自分たちがしでかした不始末の後始末を全て市芦におつかぶせるような事をやろうとしていると思

んです。別に可もなく不可もなく好き放題にして、いい男を見つけて結婚したら何とかいい人生が送れるかなあと思っていた、普通の高校生というか、やんちゃな高校生だったんです。（笑）

そして結婚して長男を出産したんですけど、それがまたどういうわけか、神様からの授かりものといったらきれいな事ですけど、大変な子どもが生まれました。見たこともない子どもだったもので、病院に行ったり訓練に行ったりして、右往左往してたんです。息子が生まれて二三年ぐらいたった時に、そのころ豊中に住んでいたんですけども、芦屋に知っている人がいて、「市立芦屋高校いうところは障害持っている子が入る」「へえそんな学校があるんや」と、そんなに単純に、市芦に障害児を入れようというふうに、今考えてもあれなんですけども、行かそうと思っただけです。

高校に障害児が行くというのは他にはないですからね。日本広しといえども、他にないんです。田舎に行けば行くほど、障害を持った子どもは施設です。私はやっぱり施設にだけは入れたくなかったです。私の手元で育てたいと思っていました。高校というところに障害児が入れるところがあるんや、ということに引越して来ました。市立芦屋高校に障害を持った子が入れ

るっていう熱い思いをずっと思っていたのに、息子の時の二年ぐらい前、今から一七年ぐらい前から、先生がとばされたりとか、障害を持った子が入れないとか、そんな動きがどんどん出てきた。進学保障制度を守りながらも障害を持つている子ども達を市芦に入れたという思いがどんどん広がり、そのときも大きなうねりが出来ました。その中に障害者の運動をしている私たちも一緒に加わりまして、障害を持つている子も含めた、市芦を必要としている生徒を切り捨てない、といういろいろな人との出会いがあつて、向かつていったんです。



その時、私の息子が中学三年の時に、大きな出会いが会ったんです。うちの息子の世話をよくしてくれると思う子どもでない、いわゆるうちの子どもをいじめたり、学校でガラスを割ったり、たばこを吸ったり、そんな荒れている子がいたんです。同じ学年の。で、その子たちが、卒業間近のある時に担任の先生に言ったんです。「俺ら市芦受けようと思うけど、多分受けられへんやろな。勉強あんまり好きちゃうし。学校あんまりこへんかったから行かれへんやろ。そやけど、あいつら入れたってや」そう言ってくれた生徒がいたんです。「あいつら入れたってくれや」と言ったのが、うちの息子ともう一人障害を持った子どもの、この二人の事だったんです。「あいつらどんな時でも休まんと来よったやん。そやからあいつらを入れたたらええやんな」って言うてくれたんです。

私はそれまで、みんなの中で一緒に共に生きて、障害のある子もない子も同じ学校で過ごさせたい、そんな思いで小学校も中学校も入れてきたんですけれども、友達とか胸がキュンとなるような子ども達とか何人かに出会ってはいませんでした。この時ほどいっしょに高校に行かせたいって思ったことはありません。そんなふうに言うてくれる子ども達と一緒に行けたらいいなって、そう思って、その

時、本当に進学保障制度をなくさずに、潰さずに、どんな子どもも、高校を必要としている、市芦を必要としている子ども達を入れようという運動の中に、私も率先して入って行きました。

そして障害者のグループもずいぶん立ち上がった、頑張ったのですけど、その「行ったらええやんな」と言った子らも落とされましたし、障害を持った子も落とされました。

それがきっかけで、今の、『障害者が街で共に生きるみんなの麦の家』というのが設立されたんです。今は障害者の作業所として、なんとか地域で切れないように一所懸命やっていますけど、もともとの麦の家の設立に当たっては、そういう、「あいつら一緒に行ったらええやんな」と言った生徒と、そして、「もう独りぼっちになりたくない、いろんな子ども達といろんな世界を共に生きたい」という障害児とその親のそんな繋がりを裁ち切りたくない、繋ぎ合わせて、一緒に生きていける場だと信じて、市芦への思いを引き継いでそこに賭けて来ました。

それから暫く経ちまして震災になり、また震災で運悪く、運良くというんですし、うか（笑い）家族ぐるみで市芦へ住まなければいけない羽目になってしまいました。こんな運命ってあるんだらうか、と私は思ったんですけど、これは市教委

が仕組んだのかとか色々思ったんですけど、家族ぐるみで市芦に入っちゃったんです。高齢者とか障害者枠で優先的に入ったんですけど、あそこはバスもなければ、近くに病院もなければ、市場もなければ、買い物をするスーパーもなんにもない。そんな所に障害者と高齢者が入ったんです。別荘じゃないんですからね。そこでまあ六四世帯が暮らしました。

芦屋の仮設住宅はたくさん学校に建ったんですね。学校にもほとんど仮設住宅が建っていったんです。市芦もその中の一つだったんですけど、一年も過ぎるか過ぎないうちに、教育委員会の方から「教育の邪魔になる」と言うことで、仮設住宅の統廃合が始まるんです。先ず最初に「出てってくれ」と言われたのが学校だったんです。

その時に市立芦屋高校も、もちろん「出ていって欲しい」ということを教育委員会の方が言ってきたんです。他の中学校とか、いろんな教育施設の方は、まあやむなく立ち退きに応じる方も出てきたんですけども、その時に市立芦屋高校に住んでいるおじいちゃん、おばあちゃん、私たち市芦の住民は「出ていきたくない」と。最初はみんな嫌がってたんですよ。あんな山奥で、猪しか居なくって。校門に猪が居て、朝になったらカラスが来て、夜になったらムカデが出て来

て、ろくでもない所だったんです。だけど、どんどん仲良くなっていくなです。ね。その仲良くなった大きなきっかけは山火事だったんです。すごく大きな山火事だったんです。避難場所の仮設住宅からまたまたみんなで避難です。そして大雨が降ればまた避難。お年寄りや動けない人がいる。みんな助け合って逃げられないんです。

その火事の時に、今から言いますけど、「市芦の生徒がタバコの不始末で燃やしたんちゃうやろか」って、住民の中で声が出たんです。その時に集まって話し合ったときに、「ほんまにそうなんやろか。市芦の生徒がほんまにタバコの不始末をしたんやろか」という話になった。ある住民の方、一番校庭に近い側に住んでいた方が、「ちやうと思う。そら、確かにタバコの吸い殻はあっちゃこつちやにあるけどな、わしがもうよござんととてくれやうっていうことな、こつち側に入ってくる野球のボールなんかはこつち側からちゃんと届けるからな、おまえらもタバコはあつちやこつちやに捨てんといてくれ言うたら、まもってくれとる」「だから、そんなことはない。そんなふうに決めつけたらあかん」って言う一人のおじいちゃんが居たんです。ほんで、市芦の生徒達が仮設の所に来てタバコを吸っているその時に、「火事にな

ったら、お前ら疑われるで」とか言うおじいちゃんが居たり、また、「ごめん、こでちよつと昼寝してもいい。学校おもしろないから、こで昼寝して帰る」とか集会所に上がって来たり、仮設の裏つ側にある裏庭で遊んだりとか。まあかくまった訳ではないんですよ。ただ「来たい」と言うから、「来たらええやん」と言うおじいちゃんとおばあちゃんらが居て、「あそこに住ったら何かなんぶり出来る」と言う市芦の生徒が居て、そんな人があつたらね、「市芦から出て行かなあかんねん」という声を市芦の生徒とか、PTAのお母さんとか、先生に、「私たち出て行きたくないんです。また一から生活をやり直すのは大変なんです」と訴えた時に、市芦だけが「出て行け」とは言うわん。別に居たらええとも思わんけども、出て行けとは言うわん」という市芦の雰囲気だったんです。

私は良いにつけ悪いにつけ、やつぱり市芦の中に、情けがあるというんですか、「気になるあいつはほつとかれへん、そんなんええやんか」、そういうものが必ず市芦を語る時に一緒に生まれてくるんです。

「あいつをほつとかれへんなあ」という側に私が息子と共に居たものですから、その情けとか情とか、そういったも